

【クロージング全体会】 国際的な市民のつながりを考える ～市民社会、分断と暴力の罫にはまらないために～

開催目的

日本でも分断と孤立が問題になっていますが、国際社会に目を向けると人権、民主化などさらに多くの問題があります。それは、その国だけの問題でしょうか？また、国際協力 NGO だけが頑張ればいいのでしょうか？「市民のつながりが社会を変える」との思いで活動している方々のお話を聞き、市民一人ひとりができること、私たちが「分断」することなく、市民の自由な発想と活動の力を見つめなおしましょう！

参加者数

51名（会場25名、オンライン26名）

出演者

【課題提起】小泉 尊聖 さん（ひろがれ！ピースミュージアムいたばし 共同代表／
アフリカ日本協議会 国際保健プロジェクト コーディネーター）

【話題提供者】宗田 勝也 さん（難民ナウ！ 代表）

【コーディネーター】枝見 太郎 さん（富士福祉事業団 理事長）

出演者の発題・発表内容

小泉さん：国際協力、平和構築に30年以上関わった経験からの課題提起

アフガニスタン（2007～2011年）では、NATOを始めとする世界各国の軍隊が治安を守る中、草の根の活動による開発への資金提供を行い、紛争からの復興を支援しました。そして、シリア（2014～2015年）では、空爆から逃れる人々の支援を行いました。しかし、国としての支援である以上、アフガニスタン、シリアの人々のことを思って活動をしているものの、日本の安全保障のための活動であり、日本の国益に縛られる平和構築であることに葛藤を感じました。

最終的に、自分の想いを大切に、シリアの人々の声を世界に届けることで世論を変えて、平和につなげたいというメンバーが集まり、「シリア支援団体サダーカ（友情）和平ネットワーク」として活動を始めました。2018年からは、板橋区で、平和について考えている地域の人々と一緒に、自由に平和について考え、発信する場所として「ひろがれ！ピースミュージアム」に立ち上げて活動しています。

市民こそが、もっと自由に考えて、行動して、国益だけにとどまらない市民社会のための行動ができると信じて、「暴力と分断」を超えていくことを課題提起とさせていただきます。

宗田さん：活動の現場から感じていること

難民ナウ！は、情報発信を通じた難民支援として2004年に設立。天気予報のように、ラジオでインタビューを流すことで、難民問題は私たちの暮らしの中で起きている身近なこととして感じてもらい、関心を持つ人を少しでも広げていきたいと思って活動しています。

「難民」という言葉を知らない人はいないと思いますが、「正しく」知ってもらうことが大切です。そのためにも当事者の声を聞いてもらうことも大切ですが、それ以外にもアーティストとコラボして、難民からイメージする作品の展覧会を通して難民の方の多様性気づいてもらう活動や大学と連携し、奨学金で難民の方の受け入れを推進する活動なども行っています。

ミャンマーのことに関わるきっかけは2010年に、難民のことは難民の方が発信するべきだという難民の方々のネットワーク組織（RCCJ）と一緒に活動したことです。現地にも足を運んだこともありますが、2021年2月にクーデターが起きました。そこから、現在まで市民への攻撃も続いています。

「声を上げ続けることが大事」というミャンマーの方の声を受け、オンラインでミャンマー「ともに歩む/前に進む」というプログラムを行いました。昨年の12月にいったん終了し、今は学校に行き話すなど、より直接的に届ける活動をしています。実際の支援活動としては募金がメインとなります。もう一つ、日本政府がミャンマーの軍人を留学生として受け入れていることへの反対キャンペーンなども行っています。

最後、小泉さんから宗田さんに質問がありました。

「ミャンマーで市民への攻撃がある中、先住民と市民が武装して軍に対抗する動きもある。ラジオなどを通じて、そうした声を広げていくことは逆に分断にはならないか？」

宗田さんからは、日々葛藤しているとの回答がありました。非暴力を大切にしてきたが、非暴力を訴える事の難しさも感じている。だからこそ、非暴力を実現するために政治家に会い、市民の声を届ける、市民同士の連帯を広げるための行動をしている、と。

討議の論点と明らかになった課題

- 世界各地で紛争が起きているが、日本では報道も少なく、実態を知ることが難しい
- 国際協力の中で、本当にその国の市民のための活動ができているのか
- 難民状態の方を「非人間化」することで良心の呵責から逃れ、無関心になっていないか
- 国は、市民と対話しながら政策を作り上げるよりも、権力構造の中で進めるやり方が残っている、それを変えるためにも市民が学び、市民から声を上げることが重要

企画者より

世界各地では、今もリアルタイムで紛争などが起きています。国際協力に関わる1部の人だけではなく、普段ニュースでは聞けない現場の話聞いて、ぜひ世界のどこか遠い国での話ではなく、自分事として向き合ってもらいたいと思っています。とはいえ、ミャンマーの問題など、自分たちが関心を持って、自分事として捉え、何かを実行していくのはかなり難しいとも感じます。それでも、自分達に何ができるかを考えていくことは必要だと思っています。遠い島国の我々だから出来ることもあるのではないのでしょうか。

企画・運営

枝見 太郎（富士福祉事業団 理事長）

神元 幸津江（NPO 法人ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし 副理事長）